

Title	毛宗崗本『三国志演義』の関心の在り処：呉と魏の関わりと人物評価から
Sub Title	Place of interest in Mao Zonggang's edition of Sanguo zhi yanyi : focused on the relationship between Wu and Wei and character evaluation
Author	鵜浦, 恵(Unoura, Megumi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.2 (2022. 12) ,p.129 (128)- 147 (110)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	高橋智教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230002-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

毛宗崗本『三国志演義』の関心の在り処

——呉と魏の関わりと人物評価から——

鶴浦 恵

一 はじめに

現代においてもなお広く読まれ続けている『三国志演義』は、その名の通り魏・呉・蜀の三国鼎立時代を描いたものだが、漢王朝を受け継がんとする「善」として描かれる蜀、一方で漢王朝から帝位を篡奪した「悪」として描かれる魏の二国の対立の他に、そのどちらでもない呉という存在があるからこそ、『三国志演義』の物語は深みを増し、読者の心を掴んできたと言ってもいいだろう。ある時は蜀と手を結び魏に対抗し、またある時は魏と同盟関係を築いて蜀に立ちはだかる呉は物語の中でジョーカー的な役割を持ち、単調な善悪の二項対立に陥ることを防いでいる¹⁾。

さて、その『三国志演義』には様々な版本が存在するが、その中で通行本としての地位を確立したのは清代初期に刊行された『毛宗崗批評三国志』（以下、毛宗崗本と称する）である²⁾。その首卷には毛宗崗自身によって書かれた「讀三国志法」や「凡例」が附され、本書の特徴や過去のテキストから改訂、修正したことが記されており、かなりこだわりを持って作られたことが見て取れる³⁾。また、各回の前に付けられた「総評」や本文の間に付けられた「挾批」（以下、評と称する）には『三国志演義』の文章技巧以外にも、様々な人物に対する評価が記されており、その評価に基づいて本文の改変が行われて

いることも窺える。

そこで本稿では、蜀と魏のはざままで様々な立場を取る呉の人物について、毛宗崗の評価を整理し、毛宗崗本の底本となる『李卓吾先生批評三国志』（以下、李卓吾本と称する）と本文の比較も交えつつ、魏との関わりという視点から「苦肉の計」に関わる人物及び張昭に焦点を当て、その評価の特徴を考察する。⁴

二 「苦肉の計」における評価

呉の人物に関する毛宗崗の評について、その特徴として彼らの人物像に関する評、あるいはそれに対する毛宗崗の評価が書かれた評が、蜀や魏の人物に比べて全体的に少ないということが挙げられる。よく知られているように『三国志演義』は蜀（蜀漢）を正統とし、漢王朝への忠誠心を主題としている物語であり、その中で呉という存在はあくまでも蜀と魏の争いの引き立て役に過ぎない。⁵したがって毛宗崗の関心も希薄なものとなるのも頷けるが、その中で毛宗崗が多くの評を付けていたのが黄蓋、闕沢、甘寧の三人である。彼らは『三国志演義』第四十六回から四十七回にかけて、周瑜と共謀した「苦肉の計」で曹操を欺くことに成功し、それによって蜀と呉の連合軍は赤壁の戦いにおける勝利へと大きく近づくことになる。まずはその「苦肉の計」で身体を張った黄蓋に関する毛宗崗の評を見ていく。

① 黄蓋に対する評価

（一）第四十六回 総評

黄蓋苦肉之計、苟非黄蓋之所自願、此豈周瑜之所能使哉。周瑜深欲用此計、而恨未得黄蓋之一人。唯黄蓋眞能舍此身、而後可行苦肉之一計耳。作者於此、不是寫周瑜之智、正是寫黄蓋之忠。亦只是寫黄蓋之忠、不是寫黄蓋之智。

（二）第四十六回

蓋曰「某受孫氏厚恩、雖肝腦塗地、亦無怨悔。」瑜拜而謝之曰「君若肯行此苦肉計、則江東之萬幸也。」【周瑜苦心、黃蓋苦肉。苦心不易、苦肉更難。】

(三) 第四十九回

黃蓋望見穿絳紅袍者下船、料是曹操、乃催船速進、手提利刃、高聲大叫「曹賊休走、黃蓋在此。」操叫苦連聲。張遼拈弓搭箭、覷着黃蓋較近、一箭射去。此時風勢正大、黃蓋在火光中、那裏聽得弓弦響、正中肩窩、翻身落水。【正寫曹操被火、忽寫黃蓋落水。正快意時、又見此不快意事、令人閱至此、不得不急欲看後文也。】

(二)では「苦肉の計」について、実現を可能にしたのは黄蓋が身を犠牲にしたからであり、傍線部で示した通り「周瑜の智を描いているのではなく、まさに黄蓋の忠を描いているのである」と黄蓋の功績を強調している。(二)は周瑜が黄蓋に対して「苦肉の計」を引き受けてもらうよう依頼する場面だが、毛宗崗は「周瑜の苦心と黄蓋の苦肉。苦心も易しくはないが、苦肉は更に難しい」と周瑜と比較して黄蓋の苦勞を強調しており、(一)に挙げた総評とも評価が符合していることがわかる。(三)は諸葛亮と周瑜による火攻めの計が成功し、黄蓋が曹操の艦隊のもとへ乗り込み曹操を窮地に追い詰めたところ、張遼が放った矢に当たり落水した場面だが、毛宗崗は曹操が火に囲まれる姿を「快意」、黄蓋の落水を「不快意」と評し、読者がハラハラして続きを読みたくなるようにさせていると述べている。この場面において、黄蓋は読者の味方として描かれていることが窺える。また、(三)に続く次の場面では彼の「忠」について再度触れられている。

(四) 第五〇回

韓當冒烟突火來攻水寨、忽聽得士卒報道「後稍舵上一人、高叫將軍表字。」韓當細聽、但聞高叫「公義救我。」當日「此黃公覆也。」急救救起。見黃蓋負箭着傷、咬出箭桿、箭頭陷在肉內。韓當急爲脫去濕衣、用刀剜出箭頭、扯旗束之、脫自己戰

袍與黃蓋穿了、先令別船送回大寨醫治。原來黃蓋深知水性、故大寒之時、和甲墮江、也逃得性命。【黃蓋苦肉於前、又苦肉於後、勇不避難、極寫其忠。】

ここでは落水した黄蓋を韓当が助けたところ、黄蓋は矢が突き刺さって負傷していたものの、水に慣れていたことでなんとか極寒の中でも生き延びたことが書かれている。毛宗崗は黄蓋に対して「黄蓋は以前も『苦肉』をしたが、さらにその後も『苦肉』をすることになった。勇ある者は困難を避けないものであり、その忠がはつきりと描かれている」と評し、彼の「忠」を強調している。

さて、(一)の総評では「ただ黄蓋の忠を描いているだけであり、黄蓋の智は描いていない」とも書かれているが、「苦肉の計」において、その知性が毛宗崗に絶賛された人物がいる。それが次節で取り上げる闕沢である。

② 闕沢に対する評価

(一) 第四十六回

且說黃蓋臥于帳中、諸將皆來動問、蓋不言語、但長吁而已。忽報參謀闕澤來問、蓋令請入臥內、叱退左右。闕澤曰「將軍莫非與都督有仇。」蓋曰「非也。」澤曰「然則公之受責、莫非苦肉計乎。」【不用黄蓋説明、先是闕澤猜破。妙。】蓋曰「何以知之。」澤曰「某觀公瑾舉動、已料著八九分。」【唯孔明便識得十分。】蓋曰「某受吳侯三世厚恩、無以為報、故獻此計以破曹操。吾雖受苦、亦無所恨。吾遍觀軍中、無一人可為心腹者。唯公素有忠義之心、敢以心腹相告。」澤曰「公之告我、無非要我獻詐降書耳。」【又不用黄蓋説明、先是闕澤猜破。妙甚。】蓋曰「實有此意。未知肯否。」闕澤欣然領諾。

(一)は「苦肉の計」の一環として杖刑に遭った黄蓋のもとに闕沢が訪ねてきた場面である。闕沢が黄蓋に罰を受けたのは「苦肉の計」のためではないかと切り出したとき、傍線部で示したように毛宗崗は「黄蓋の説明がなくとも先に闕沢が見

破った。素晴らしい。」と評しており、さらに黄蓋が關沢を曹操への使いとして考えていたことも見抜いたあとに同じ文章で再度評価し、關沢の能力の高さを強調している。毛宗崗が關沢を優れた人物と評価しているのは、次の(二)や(三)でも見て取れる。

(二) 第四十七回 総評

前回寫甘寧、此回寫關澤。而極寫關澤、必先極寫曹操。不寫曹操之奸、不顯關澤之巧。若彼不知爲苦肉計而欺之不難、惟彼既知爲苦肉計而欺之爲難也。彼不知爲詐降書而中之不足奇、惟彼既知爲詐降書而我終能中之爲奇也。計雖巧、而無行計之人則亦拙。計雖庸、而有行計之人則不庸耳。

(三) 第四十七回

曹操於几案上翻覆將書看了十餘次、忽然拍案張目大怒曰「黃蓋用苦肉計、令汝下詐降書、就中取事、却敢來戲侮我耶。」二人機謀被他明明道破。讀者至此、爲黃蓋惜、又爲關澤憂矣。」便教左右推出斬之。左右將關澤簇下。【令讀者急殺。】澤面不改容、仰天大笑。【①寫關澤真是有膽。】操教牽回、叱曰「吾已識破奸計、汝何故哂笑。」澤曰「吾不笑你。吾笑黃公覆不識人耳。」【②笑黃公覆、正是笑你。却偏說不笑你、笑黃公覆。寫關澤真是能言。】操曰「何不識人。」澤曰「殺便殺、何必多問。」【③寫關澤真是有膽。】

(四) 第四十七回

辭別出營、再駕扁舟、重回江東、來見黃蓋、細說前事。蓋曰「非公能辯、則蓋徒受苦矣。」【黃蓋捨身、關澤掉舌。然關澤亦惟能捨身、故能掉舌耳。不似今人之不肯捨身、但能掉舌也。】

(二)の総評では、曹操の「奸」を書かなければ關沢の「巧」が見られないことや曹操が「苦肉の計」を知っているからこそ欺くのが難しいことを述べた上で、傍線部で「計略が巧みなものであっても、実行できる人がいなければ稚拙なものとなり、計略が凡庸なものであっても、実行できる人がいれば凡庸なものではなくなる」としており、間接的に關沢の重要性を強調していると言えよう。(三)は關沢が曹操に謁見し、黄蓋からの書簡を見せ終わった場面である。曹操は黄蓋が「苦肉の計」を用いていることをすぐさま見抜き、關沢を処刑しようとするが、關沢は顔色一つ変えない。毛宗崗はそれに対して傍線部①で「本当に關沢に度胸がある様を描いている」と評している。同じ評語が傍線部③にもあり、曹操に対して「殺すなら殺せ」と堂々としている關沢を評価していることがわかる。また黄蓋は人を見る目がないと言って笑ったことについて、傍線部②にあるように「黄蓋を笑っているのではなくまさにあなたを笑っているのである。しかしあなたを笑ってはおらず、黄蓋を笑っているのだとだけ言っている。關沢の言説が巧みであることを描いている」と關沢の発言の意図を解説している。

(四)は無事曹操を騙し終え、自陣に戻り關沢が黄蓋に報告している場面である。毛宗崗は「黄蓋はその身を捨て、關沢は弁舌を振るった。しかし關沢もまたその身を捨てることのできるものであり、だからこそ弁舌を振るえるのである。」とここでも關沢の度胸を評価している。このように、毛宗崗は繰り返し評で關沢のことを称賛しているが、毛宗崗のその評価が文章の改変に表れている箇所も見受けられた。次に挙げる三つの例がそうである。比較対象として、毛宗崗本の底本である李卓吾本の同じ場面と併記する。

(五) 第四十七回

〔李卓吾本〕

關澤、字德潤、會稽山陰人也。家本庄農、酷嗜儒業、但家甚貧、與人傭工、①借書誦、但寫一篇、並無遺忘。少有膽氣、對答如流。舉孝廉、除錢塘長。孫權慕其名、召爲參謀。②因此黃蓋知其能言有膽、故遣往之。

〔毛宗崗本〕

却說闕澤字德潤、會稽山陰人也。家貧好學、①嘗借人書來看、看過一遍、便不遺忘。口才辨給、少有膽氣。〔膽氣從讀書得來。〕孫權召爲參謀、②與黃蓋最相善。

この場面では闕沢の生い立ちが書かれているが、傍線部①について李卓吾本では「本を借りて声に出して読み、一度書き写しただけで決して忘れなかった」としているのに対し、毛宗崗本では「いつも本を借りて来て読み、一度読めば決して忘れなかった」と変えており、闕沢の能力がより秀でたものになっている。また、傍線部②では李卓吾本の「したがって黄蓋は闕沢が弁舌に優れ度胸があることを知っていて、故に魏に行かせたのである」という部分が毛宗崗本では「黄蓋と最も仲が良かった」とされ、ただ客観的な条件から闕沢を選んだ李卓吾本に比べて、毛宗崗本では二人の関係性がより深いものになっている。またここに付けられた評には「闕沢の度胸は読書から来るものだ」とあり、彼の知性を強調している。

(六) 第四十七回

〔李卓吾本〕

闕澤聽罷曰「汝不惶恐、敢誇年幼熟讀兵書。若戰、必被周瑜擒矣。無學之輩、可惜吾屈死汝手。」操曰「何謂我無學。」澤曰「②汝既通書、不識機謀、不明道理、故知必敗耳。」操曰「且放他、看說我幾般不是處。若果理直氣壯、必有議論。」澤曰「某見汝無待賢之禮、吾何必言。但有死而已。」操曰「③願聞高論。」

〔毛宗崗本〕

闕澤聽罷、大笑曰「虧汝不惶恐、敢自誇熟讀兵書。①還不及早收兵回去。儻若交戰、必被周瑜擒矣。無學之輩、可惜吾屈死汝手。」〔自負有智、偏要笑他無學、純用反激語。妙。〕操曰「何謂我無學。」澤曰「②汝不識機謀、不明道理、豈非無學。」〔妙在不即說。〕操曰「你且說我那幾般不是處。」澤曰「汝無待賢之禮、吾何必言。但有死而已。」〔妙在不肯說。〕操曰「③汝

若説得有理、我自然敬服。」【正要逼他說此一句、然後説耳。】

闕沢を疑う曹操との応酬において、李卓吾本と語句の異同が数多く見られたが、大きく異なる点のみ述べる。まず毛宗崗本では、傍線部①で示したように「さつさと兵をまとめて帰った方がよい」というセリフが付け加えられている。全般的に毛宗崗本は李卓吾本の冗長な記述を削いで簡潔にする傾向にあるが、わざわざこのセリフを足すことで、闕沢の毅然とした態度がよりはっきりと示されていると言えよう。次に傍線部②で示したところでは、曹操の「どうして私を無学と言うのか」という問いに対して、李卓吾本は「おまえは既に書に通じておきながら、臨機応変の計略を知らず、道理もわかっていないのだから、必ず敗れるとわかるのだ」と返しているのに対し、毛宗崗本は最初の句を削除した上で最後を「どうして無学でないことがあるうか」としている。毛宗崗本の方が曹操の問いに沿った答えであり、さらに「無学」の語を繰り返して述べることで、直前に付けられた評にあるように、己の学を鼻にかけている曹操に対する痛烈な反駁にもなっているのである。最後に傍線部③では、李卓吾本の「願わくば高論を聞こうではないか」という曹操のセリフが「おまえの話に筋道が通っているなら、私はもちろん敬服する」に変えられている。毛宗崗本ではこの時点で曹操が闕沢に気圧されている様子が表れている。

(七) 第四十七回

〔李卓吾本〕

澤曰「豈不聞『背主作竊、安可期乎』。這語言那背主謀反、如何約日期。倘有了日期、急下不得手、這裡接應、必然泄漏。只是但得便就行矣。」②曹操是箇聰明人、一點便悟、下席復禮「適來曹操見事不明、誤犯尊威、幸勿掛意。」

〔毛宗崗本〕

澤曰「豈不聞『背主作竊、不可定期』。儻今約定日期、急切下不得手、這裏反來接應、事必泄漏。但可覷便而行、豈可

預期相訂乎。①汝不明此理、欲屈殺好人、眞無學之輩也。」〔寫關澤眞是能讀書人。方見孔明激孫權、激周瑜、又見關澤激曹操。愈出愈奇。〕②操聞言、改容下席而謝曰「某見事不明、誤犯尊威、幸勿掛懷。」〔惟聰明人能轉變、亦惟聰明人偏着騙耳。既已道破、又被瞞過。〕

(六)から続くこの場面では、曹操が關沢を疑った理由である、黄蓋からの降参の書に期日が書かれていないことに関する弁明が始まる。傍線部①で示したように、毛宗崗本は關沢のセリフの最後に「おまえはこの道理もわからず、立派な人を無実の罪で殺そうとしているのだから、本当に無学の輩だ」という一文が加えられており、(六)で挙げた場面から数えるると三回目の「無学」という語の使用となるが、毛宗崗本では曹操に対する最も効果的な言葉として意識されているのである。直後の評では「關沢がまことに書を読むことのできる人であることを描いている。」と關沢の知性はここでも示されている。また、曹操の反応も両版本間で大きく異なる。傍線部②のように李卓吾本では「曹操は聡明な人であるから、すぐに理解した」と書かれているが、毛宗崗本では「曹操はこの言葉を聞いて」に書き換えられており、曹操を褒めるような表現を排除するとともに、關沢によって完全に説き伏せられた様を描く。

このように、毛宗崗の關沢に対する評価は非常に高く、關沢の優れた側面がより強調されるような本文の改変もなされていることがわかる。ただし、(二)で挙げた総評にもあるように、曹操の「奸」たる側面を描くことで關沢の巧みさが際立つのであり、二人の描写は表裏一体の關係にあるとも言えよう。

「苦肉の計」の成功には、もう一人の武将の活躍も欠かせない。曹操から送られてきたスパイである蔡和、蔡仲を關沢とともに欺き、内応するかのように見せかけた人物、甘寧である。

③ 甘寧に対する評価

(一) 第四十六回

周瑜勃然變色、大怒曰「吾奉主公之命督兵破曹、敢有再言降者必斬。今兩軍相敵之際、汝敢出此言慢我軍心、不斬汝首、難以服衆。」喝左右將黃蓋斬訖報來。黃蓋亦怒曰「吾自隨破虜將軍、縱橫東南、已歷三世、那有你來。」瑜大怒、喝令速斬。甘寧進前告曰「公覆乃東吳舊臣、望寬恕之。」瑜喝曰「汝何敢多言、亂吾法度。」先叱左右將甘寧亂棒打出。【前收二蔡是假喜、今打黃蓋定是假怒、想甘寧早已心照矣。】衆官皆跪告曰「黃蓋罪固當誅、但於軍不利。望都督寬恕、權且記罪。破曹之後、斬亦未遲。」瑜怒未息。衆官苦苦告求。

(二) 四十七回

澤至寧寨、寧接入。澤曰「將軍昨爲救黃公覆、被周公瑾所辱、吾甚不平。」【妙在反言以試之。】寧笑而不答。【寫甘寧是解人。笑者、與闕澤會意也。不答者、瞞着二蔡也。】正話間、蔡和、蔡中至。澤以目送甘寧、【甘寧以笑、闕澤以目。一笑一目、如相問答。】

(一) では、周瑜が諸將の前でわざと黄蓋と言い争い、黄蓋が斬られようとした際、甘寧が進み出て周瑜を諫めたものの、周瑜は聞き入れず、諸將の再三にわたる懇願によつてようやく黄蓋は杖刑となる。この場面では、本文だけを読むとあたかも甘寧は他の諸將と同じように本気で周瑜が黄蓋を殺そうとしていると考えているように思えるが、傍線部で示したように毛宗崗は「甘寧はすでにもう心の中ではつきりとわかつていたのだろう」と述べている。実際に、(一)で挙げた場面からは甘寧が「本気だと思って諫める」という演技をしていたということが推測できる。また、(二)で付けられた評には傍線部の通り「甘寧は物事の意味をよく理解する人物である。笑ったのは闕沢の意を汲み取ったからであり、答えなかったのは蔡和蔡仲を騙すためである」と書かれており、甘寧と以心伝心で「苦肉の計」を進めていく様子が描かれている。なお、甘寧については「苦肉の計」以外のところでも称賛するような評があり、毛宗崗が彼のことを高く評価していることが窺える。

以上のように、毛宗崗は「苦肉の計」に大きく貢献した黄蓋、闕沢、甘寧に対して総じて好意的な評を付けており、それ

に合わせた本文の改変も行っていることが確認できた。漢王朝を脅かす存在である曹操は、毛宗崗本において「奸」絶とされ、徹底した悪役として一貫性をもって描かれている。従って、毛宗崗にとって「苦肉の計」の一段は、曹操の「奸」絶たる側面を強調した上で、その曹操が見事にしてやられる様を痛快に描出することのできる格好の題材であったのだろう。特にその胆力と機転、弁舌の巧みさを直接曹操に対して遺憾なく發揮した闕沢に対して、毛宗崗は極めて高く評価していることがわかる。また、毛宗崗が彼らを手放しに褒めることができた背景には、彼らが蜀とは殆ど直接干戈を交えていないことも指摘できよう。¹⁰ 彼らの行為は呉という国で行われたものであっても、ともに曹操へと立ち向かうことで、間接的ながらも充分『三国志演義』の主題である漢王朝への忠誠に寄与することができていたのである。

一方、曹操に立ち向かうとしなかったことで毛宗崗から低い評価を与えられた人物もいる。次章では幾度となく孫権に對して魏と戦わないことを進言した張昭への評価を見ていく。

三 張昭に対する評価

張昭は周瑜の進言を通して張紘と共に孫策に招かれ、その後も長く呉に仕え続けた人物である。前述のように呉の人物に對する毛宗崗の評は全体的に少ないが、その中で張昭については、彼を批判するような評が数多く見受けられた。

(一) 第三十八回

建安七年、曹操破袁紹、遣使往江東、命孫權遣子入朝隨駕。權猶豫未決。吳太夫人命周瑜、張昭等面議。張昭曰「操欲令我遣子入朝、是牽制諸侯之法也。然若不令去、恐其興兵下江東、勢必危矣。」^①既知遣質之爲牽制、而又憂不遣質之將危、是首鼠兩端之語。」周瑜曰「將軍承父兄餘資、兼六郡之衆、兵精糧足、將士用命、有何逼迫而欲送質於人。質一入、不得不與曹氏連和。彼有命召、不得不往。如此則見制於人也。不如勿遣、徐觀其變、別以良策禦之。」^②孔明爲玄德畫策、只數語決疑。周瑜爲孫權畫策、亦只數語決疑。」

(二) 第三十八回

至來年春、孫權商議欲伐黃祖。張昭曰「居喪未及期年、不可動兵。」周瑜曰「報讐雪恨、何待期年。」【伐人之喪不可、喪中伐人亦不可。然以報父讐則無不可也。若論報讐、正當服縞素而興師、何待服除之有。張昭之見、往往不及周瑜。】

(一) は曹操が袁紹を打ち破つたのち、孫權に対して息子を入朝させろと命じてきた場面である。孫權は判断に困り、母の呉太夫人が周瑜や張昭ら呼び寄せて相談するが、そこで張昭は曹操が諸侯を牽制しようとしていること、しかし息子を送らなければ曹操は軍勢を率いて江東に攻め寄せてきて危険であることを述べる。この意見に対して、毛宗崗は傍線部①で示したように「すでに人質を送ることが牽制だと分かっておきながら、さらに人質を送らない場合の危険を心配しており、どっちつかずの意見である」と批判している。対照的に、人質を送らず、情勢の変化をゆっくりと見ることを述べた周瑜については、傍線部②の通り「孔明が玄德のために策略をめぐらす際、たった数語で疑問は解決する。周瑜が孫權のために策略をめぐらす際もまた、たった数語で疑問は解決するのである」と孔明と並べて称賛している。

(二) は孫權の母の呉太夫人が亡くなった翌年に、孫權が孫堅の仇である黃祖を征伐するかどうかについて臣下に相談した場面である。張昭は母上の喪に服して一年経っていないことから兵を動かすことを否定し、周瑜は仇を討ち恨みを雪ぐためには一年待つ必要はないと説いている。毛宗崗は評において周瑜の意見に賛同しており、下線部で示したように「張昭の見識は往々にして周瑜に及ばない」と述べている。いずれの場面でも張昭を周瑜よりも評価していないということが窺える。

(三) 第四十三回

昭曰「若此、是先生言行相違也。先生自比管、樂。管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下。樂毅扶持微弱之燕、下齊七十餘城。」

此二人者、眞濟世之才也。先生在草廬之中、但笑傲風月、抱膝危坐。今既從事劉豫州、當爲生靈興利除害、剿滅亂賊。【①不責其不降曹、反責其不攻曹、惡極。】且劉豫州未得先生之時、尙且縱橫寰宇、割據城池。【②此句更惡。】今得先生、人皆仰望。雖三尺童蒙、亦謂彪虎生翼、將見漢室復興、曹氏即滅矣。朝廷舊臣、山林隱士、無不拭目而待、以爲拂高天之雲翳、仰日月之光輝、拯民于水火之中、措天下于衽席之上、在此時也。【③故意先將他極口一贊。】何先生自歸豫州、曹兵一出、棄甲拋戈、望風而竄。上不能報劉表以安庶民、下不能輔孤子而據疆土、乃棄新野、走樊城、敗當陽、奔夏口、無容身之地。是豫州既得先生之後、反不如其初也。【④將他極口一貶。說玄德反不如初、是更進一層、其語尤惡。】管仲、樂毅、果如是乎。愚直之言、幸勿見怪。【⑤當面搶白。】

(四) 第四十三回

孔明聽罷、啞然而笑曰「鵬飛萬里、其志豈羣鳥能識哉。譬如人染沉疴、當先用糜粥以飲之、和藥以服之。待其腑臟調和、形體漸安、然後相肉食以補之、猛藥以治之。則病根盡去、人得全生也。若不待氣脈和緩、便投以猛藥厚味、欲求安保、誠爲難矣。」【先生忽然講醫道、隱然笑張昭是庸臣謀國、如庸醫殺人也。】

(三) は諸葛亮が孫権に曹操との開戦を決意させるべく、單身具に渡り、孫権に会う前に呉の臣下たちと舌戦を交える場面である。真つ先に話しかけた非開戦派の張昭は、諸葛亮が劉備に仕えるようになってから成果を上げておらず曹操に負け続けていることを責め立てるが、毛宗崗は張昭の言動について、傍線部①「曹操に降伏しなかったことを責めず、かえって曹操を攻撃しなかったことを責める、非常に悪質である。」②「この言葉はさらに悪質だ。」③「わざと彼のことをまづ褒めちぎっている」④「口を極めて彼のことを貶している。玄德について事態が最初よりも悪くなっているなどと言うのは、より一層悪質だ。」⑤「面と向かって皮肉を言っている」と立て続けに批判している。なお、二重傍線部を引いた箇所は李卓吾本では「此所謂『達則兼善于天下』¹¹」となっているが、毛宗崗はこの部分を続く次の評に符合するように書き換えている。

自身は曹操と戦わないことを主張しながら、劉備たちには「逆賊」曹操と戦うように責めるといふ張昭の理不尽さ、醜悪さが、毛宗崗本でははっきりと描かれているのである。

続く(四)の場面では、諸葛亮が重病にかかった者に対する治療の諭えを用いて張昭に反論している。この諭えについて、毛宗崗は評において「先生が突然医術について述べたのは、張昭は凡庸な臣下として国事を謀っており、それは凡庸な医者が患者を殺してしまうようなものだ」と暗に笑っているのだ」と張昭に対する厳しい評価を見せている。さらに次の箇所では、毛宗崗は直接的に張昭の能力について批判的な眼差しを向けている。

(五) 第四十四回総評

張昭有負孫策付託之重。或解之曰「内事不決問張昭」、原不當以外事問之。不知天下未有能謀内事而不能謀外事者、又未有不能謀外事而能謀内事者。攘外乃所以安内、外患至而不能捍、謂之知内、吾不信也。

ここで毛宗崗は孫策が孫権に対して「内の事は張昭に相談せよ」と言い残したことについて、そもそも張昭には外の事を相談してはいけないのではないかと述べており、張昭の能力に大いに疑問を呈していることが窺える。

また、(一)(二)にあつたような、他の臣下と張昭を比較する評には下記のようなものが挙げられる。

(六―A) 第五十六回

顧雍曰「許都豈無細作在此。若知孫、劉不睦、操必使人勾結劉備。備懼東吳、必投曹操。若是則江南何日得安。爲今之計、莫若使人赴許都、表劉備爲荊州牧。曹操知之、則懼而不敢加兵於東南。且使劉備不恨於主公。然後使心腹用反間之計、令曹、劉相攻、吾乘隙而圖之、斯爲得耳。」【顧雍之見、更勝張昭。】

(六―B) 第七十三回

顧雍曰「雖是說詞、其中有理。今可一面送滿寵回、約會曹操首尾相擊。一面使人過江、探雲長動靜、方可行事。」【張昭只要和魏、顧雍却有兩說。】

(六—C) 第七十三回

權曰「孤亦欲取荊州久矣。」隲曰「今曹仁見屯兵於襄陽、樊城、又無長江之險、旱路可取荊州。如何不取、却令主公動兵。只此便見其心。」【步騭略有見識、張昭不如也。】

いずれも張昭が意見を述べた直後や、あるいは張昭が同席している場で顧雍や步騭が発言した際に付けられた評であり、張昭よりも顧雍や步騭の方が優れていると述べている。さらに、わざわざ張昭の失敗をあげつらうような評も見られる。

(七) 第四十四回

瑜曰「臣爲將軍決一血戰、萬死不辭。只恐將軍狐疑不定。」權拔佩劍欲面前奏案一角曰「諸官將有再言降操者、與此案同。」【張昭此時大難爲情。】

(八) 第八十二回

却說張昭見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故假以請和爲辭、欲背吳入蜀、此去必不回矣。」權曰「孤與子瑜、有生死不易之盟。孤不負子瑜、子瑜亦不負孤。昔子瑜在柴桑時、孔明來吳、孤欲使子瑜留之。子瑜曰『弟已事玄德、義無二心。弟之不留、猶瑾之不往。』其言足貫神明、今日豈肯降蜀乎。孤與子瑜、可謂神交、非外言所得聞也。」【①朋友不相信、而君臣之相信如此、爲朋友者、可以愧矣。】正言聞、忽報諸葛瑾回。權曰「孤言若何。」張昭滿面羞慚而退。【②眞正可羞。】

(七) は周瑜が孫權に曹操と戦うよう説得に成功した場面である。張昭はこの場面の前で開戦に反対し曹操に降伏する理

由を述べていたが、周瑜に反論され、そのまま孫権は開戦の意志を決め、曹操への降伏を再度言うものがあれば一角を切り落とされた机と同じになるとまで言い放つ。そこで毛宗崗はわざわざ「張昭はこの時大いに決まりが悪かったであろう」という評を付けているのである。

同じような状況は（八）の場面でも起こっている。荊州を取り返そうと劉備のもとへ諸葛瑾が交渉しに行った際、張昭は諸葛瑾は呉を裏切つて蜀につこうとしており、もう帰つてはこないだろうと孫権に進言する。しかし孫権はきっぱりと張昭の意見を否定し、諸葛瑾への揺るぎない信頼を見せる。そこでちょうど二人が話し合っているところへ諸葛瑾が帰つて来たため、張昭は恥じ入りながら退出するのだが、ここでの毛宗崗の評は傍線部①「友人が信じていないのに君臣は互いにこんなにも信じあっている。友人たるものとして恥ずべきことだ」②「本当に恥ずかしい」と、張昭の狭量さを強調し、またすでに恥じ入っている彼に対して追い討ちをかけるようなものとなっている。

張昭を褒めるような評が全くないわけではないが、「これまでの張昭の策略の中で、唯一なんとか人を満足させられるものだ」¹³「張昭は何度も戦わないことを主としてきたが、この場面では度胸がある」¹⁴「張昭はこの時は非常に度胸を見せている」¹⁵というようにやや皮肉めいたものが多く、毛宗崗の張昭に対する冷淡な評価は一貫しているものと言えよう。その背景としては、すでに述べてきているように彼が徹底した非戦論者であり、一時的とはいえ主君である孫権に曹操への降伏を勧めたことにあると考えられる。赤壁の戦いの場面では他にも諸葛亮と舌戦を交える非戦論者もいたが、物語の中で幾度となく戦いを避けるように進言する場面が出てくるのは張昭だけである。毛宗崗によって酷評される人物には直接関羽や諸葛亮に敵対する場合や、曹操に降り蜀や漢王朝に仇なす場合が多いが、張昭のように間接的ながら漢王朝に不利に働く者にも、同じように毛宗崗の鋭い眼差しが注がれるということが指摘できよう。

四 おわりに

魏蜀呉のどの国であっても、その主君と臣下全員が一枚岩でままとまっているということはまずない。曹操と名参謀であ

る荀彧とは漢王朝に対する考え方の違いから決別せざるを得ず、最もよくまとまっているように見える蜀においても裏切者は絶えず出てくる。常に魏と蜀の間で三国鼎立のためのバランスのように働く呉には、なおさら様々な立場や考えを持った人物たちがおり、それがわかりやすい形で描出されたのが赤壁の戦い前における開戦論者と非戦論者の対立であろう。呉が劉備たちと同盟を結ぶのか、魏に降伏するのは劉備らの存亡にとつても極めて重要なことであり、だからこそ毛宗崗の関心がこの場面においては呉の人物にまで注がれたのではないだろうか。そしてその結果、呉という一つの国の中で、知恵や勇気、忠義の心をもって「苦肉の計」を成功させて曹操に立ち向かった者たちと、赤壁の戦いでの勝利に何も寄与することもなく、その後も非戦論者としてあり続けた者との、鮮やかな対比が毛宗崗の手によって生み出されることになったのである。

以上のように、本稿では、魏との関わりから呉における毛宗崗の関心の所在についてその一端を明らかにすることはできしたが、他の人物における評価や、本文の改変の傾向、及びそれらと魏や蜀といった他勢力との比較など、考察すべき点は多く、今後も様々な視点から研究に取り組んでいければと考えている。

註

- 1 金文京氏は『三国志演義の世界 増補版』（東方書店、二〇一〇年）の第一章「物語は『三』からはじまる」において、「しかも三者鼎立というのは、分裂と抗争の関係の中ではもつとも安定した性質をもっていると見える。そこでは、安定の中に抗争があり、抗争の中に安定がある。それが、持続する緊張感に富む、きわめてスリリングな関係であることは、いわゆる三角関係に如実にあらわれているよう。ある意味で、われわれはそこに、あらゆる人間関係の原型をみることさえできるのである」と述べている。

2

3

『三國志演義』の諸版本については中川論『三國志演義』版本の研究（汲古書院、一九九八年）及び注一前掲書を参照。
毛宗崗本の特徴については、仙石知子『毛宗崗批評『三國志演義』の研究』（汲古書院、二〇一七年）に過去の研究とあわせて詳しくまとめられている。また、ディテールに及ぶ毛宗崗本の改変については、仙石氏の同書の他、拙稿「毛宗崗本『三國志演義』の特徴——曹操臣下の文官における人物描写の比較の試み——」（『慶應義塾中国文学会報』第三号、二〇一九年三月）及び「毛宗崗本『三國志演義』における魏の降将——関羽との関わりから見る張遼・徐晃・龐徳について——」（『藝文研究』第一二〇号、二〇二一年）でも毛宗崗による人物評価と絡めて指摘している。

4

比較する版本について、『李卓吾先生批評三國志』と題するものは複数あるが、その中で最も古い呉観明本を用いる（対訳中国歴史小説選集 李卓吾先生批評三國志（ゆまに書房、一九八四年）。毛宗崗本は『三國演義』（上海古籍出版社、一九八九年）及び『三國演義 会評本』（北京大学出版社、一九八六年）を参照した。また、比較の際には現存する最古の版本とされる嘉靖本も用いたが、李卓吾本と大きな差が見られなかったため、特に本文に記載はしない。字体は繁体字で統一し、毛宗崗の評については必要箇所のみ¹⁾で囲んで示した。

5

『三國志演義』は蜀の人物をよりよく描くため、呉の人物は全体的に能力を低く描いていることがすでに指摘されている。特に孔明と深く関わった魯粛や周瑜、また関羽を追い詰めた呂蒙においてその傾向は顕著に表れる。注1前掲書や伊藤晋太郎『三國志演義』における呂蒙像について」（『二松学舎大学人文論叢』第一〇一号、二〇一八年十月）など参照。毛宗崗も彼らに対して様々な評をつけているが、彼らに関する毛宗崗の評価については稿を改めて論じたい。

6

黄蓋の「忠」については、第九十六回の総評でも甘寧、關沢及び同じように魏に偽りの降参をした周魴と共に触れられている。この評によれば呉の人が多く偽りを為すのは主君に報いるための「忠」であり、呉にはそういった「忠」を持つ人物が多いとされている。（黄蓋、甘寧、關澤之後、復有周魴、何南人之多詐歟。不知此非南人詐也、乃南人之忠也。用以欺敵、則謂之詐。用以報主、則謂之忠。不當曰南人多詐、正當曰南人多忠耳。）

7

關沢の生い立ちについては『三國志』「關沢伝」にも記載があり、李卓吾本に近い内容になっている。「關沢字德潤、會稽山陰人也。家世農夫、至澤好學、居貧無資、常爲人傭書、以供紙筆、所寫既畢、誦讀亦遍。追師論講、究覽羣籍、兼通曆數、由是顯名。察孝廉、除錢唐長、遷郴令。」

8

例えば第三十八回の総評では唐の軍人李勣と比較して甘寧の「忠」を称賛している。（唐徐世勣起于盜賊之中、而甘寧亦起于盜賊之中。世勣初號『無賴賊』、繼號『難當賊』、末號『佳賊』、而甘寧亦號『錦帆賊』。然世勣阿附武后、而甘寧忠事孫權。則世勣

- 9 之佳不必佳、而甘寧之錦乃眞錦也。」
 毛宗崗は「讀三國志法」において「吾以爲『三國』有三奇、可稱三絶。諸葛孔明一絶也、關雲長一絶也、曹操亦一絶也。(中略)有此三奇、乃前後史之所絶無者。故讀遍諸史、而愈不得不喜讀『三國志』也。」と諸葛亮を「智」絶、関羽を「義」絶、曹操を「奸」絶に位置つけており、それぞれの属性を強化するような改変が行われていることが注三前掲仙石書でも示されている。
- 10 例えば関羽との関係によって毛宗崗の評価が変わり得ることは、注三前掲拙稿(二〇二一)でも論じている。
- 11 この部分は『孟子』「尽心章句上第九」の次の語を引用している。「窮則獨善其身、達則兼善天下。」(テキストは全釈漢文大系、集英社、一九七三年を参照。)
- 12 毛宗崗は「讀三國志法」において人や物事を思料するのに優れた人材として張昭の名を挙げている。「三國之有三絶、固已。然吾自三絶而外、更遍觀乎三國之前、三國之後、問有運籌帷幄、如徐庶、龐統者乎。問有行軍用兵如周瑜、陸遜、司馬懿者乎。問有料人料事如郭嘉、程昱、荀彧、賈詡、步騭、虞翻、顧雍、張昭者乎。」
- 13 「向來子布畫策、唯此差強人意。」(第三十九回)
- 14 「張昭屢次以不戰爲主、此番却有膽氣。」(第六十八回)
- 15 「子布此時頗有膽氣。」(第八十二回)

【付記】本稿執筆にあたっては二〇二二年度慶應義塾学事振興資金による補助を受けた。ここに記して感謝する。